

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in むつ」を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

8年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」は、むつ市、むつ市連合PTA、下北地域県民局地域健康福祉部（青森県むつ児童相談所）と共催、青森県教育委員会・むつ市教育委員会・むつ青年会議所・下北里親会の後援を頂き、8月10日（金）～9月2日（日）団士郎家族漫画展をむつ市立図書館、8月31日（金）支援者支援セミナーをむつ市役所、お父さん応援セミナーをむつ市中央公民館、9月1日（土）漫画トークをむつ市立図書館にて開催しました。協力団体が年々増え、むつ市長と副市長も応援に駆けつけてくださいました。こちらは院生7名、総勢11名という大人数での参加となりましたが、いつもながら皆さんに暖かく迎え入れて頂きました。

支援者支援セミナーはスタッフ参加者も入ると百名近い参加者となり、地元の事例をもとにグループで検討しました。今年の事例は、メンタルヘルスの問題を抱えた母子世帯の子育てです。事例から、むつにおいて、多職種連携で手厚い支援が行われている様子が伺えます。それでも困難はつきもの。皆で知恵を出し合いました。半数近くが初参加というにも関わらず、最初から議論が盛り上がるのは、きっとリピーターたちが引っ張っていているからでしょう。アンケートでも、「具体的な地元の事例を民生委員や福祉関係、立命館の院生と検討していくなかで、様々な意見を聞くことができ、大変勉強になりました。今後の支援に役立てていきたいと思います。ありがとうございました」「エコマップ、広げる、前を向く等、これからの参考にしたいと思います。たいへんありがとうございました。また来年も参加希望です！」などたくさん声を頂きました。

夜の部のお父さん応援セミナーは男性オンリーのため、女性たちは夜のフィールドワークとしてむつを案内してもらい、セミナー終了後に合流して交流会。翌日は漫画トークでした。

漫画展の感想には、「漫画展示パネルはいろいろな自分の奥にしまってあった思いがインスパイアされるものでした。直接被災のことを扱わないけれど、過去に経験した何かや、これから起こるかもしれない何かを思い、そのことを少し大事にする、そういう気持ちを引っ張り出してくれます。ガレキ撤去じゃない復興支援、目立たないけれどホッとできる支援をありがたいと思っています」「毎年参加するようにしています。子どもが不登校から引きこもりになり、もう8年にもなります。小学校、中学校、高校と大事な時期を自宅でじっと過ごしているので、母としては不安でいっぱいです。でも、私の好きなことをして、あまり子どもを追い詰めないで生活していきたいと思います。未来なんてないけど、今を生きています」などの声を頂きました。

プロジェクトもあと2年、その後どうしていくのが話題に上るようになりました。次

の考えどころです。



むつ市長との懇談

2018 むつ便り

人間科学研究科訪問教授 団士郎

2018年のプロジェクトが始まった。

事前フィールドワークに訪れた六ヶ所村の宿舎は、70年代の活動家の集会場のような、私世代には懐かしくも印象的な宿だった。

翌日訪問した、大間原発敷地内の「あさこはうす」は、天候が良かったせいもあって、屋外で歓談するのにとても快適な場だった。大きな社会の経済や様々な力が蠢く中で、女性一人、毅然と自らの姿勢を保ちながら、孤独感が漂わないのはなかなかの心意気だ。

翌日、4回目の恐山を訪問し、敷地内の温泉に入る。慌ただしい参詣者はなかなか入浴までしないのでガランとした風呂だが、気持ちの良い時間である。

そしてプロジェクト前夜、集合場所のむつグランドホテルへ。さあ、8年目のスタートだ。現地スタッフと全体打ち合わせ後、恒例の懇親会。

翌日、初日、市役所庁舎内で開催の支援者支援セミナーでオープニングのごあいさつに。その前に、市長を表敬訪問する。長いおつきあいになる若々しい市長である。

開会直ぐ、配布している小冊子「木陰の物語」について短時間、話させてもらった。その後、私は一人で、図書館で開催中の漫画展会場に。

訪れた3人の方と言葉を交わすことになった。

むつ市図書館ギャラリーで 2018/8/31 午後

Aさん

マンガを見た後、熱心にアンケートを書いておられた。話しかけてみると、子どもに
いつい手を出してしまう自分が・・・と語りはじめる。こんな風（マンガのストーリー）
にやれたら良いけど、私は動いてしまって待てない。そして子どもにベッタリになってし
まっている。

8才から10年間も引きこもり。自動販売機までも外出しない。私が悪いのだろうが、自
分は動くのをやめられない。

小学生、おそらく不登校だったのだろうが、それから10年、今や18才無職なのであろ
う。

この頃、母がいずれ死ぬこともあると気がついて、その話をどこかで聞かされた後、一
週間ぐらい荒れて。私が悪いのだけれど、何かしないではおられない。あれやこれやと動
いてしまう。

自分で言うておられるように、あちこちの相談援助機関の常連さんなのだろう。でも、
解決しないまま10年である。

Bさん

同時並行に会場にいたこの方は、最初に会話した方。相談関係の仕事をしていたことが
あると言う。以前に漫画展にも来たことがあると聞いていると、そこで振り向いたAさん
と面識があったようで、久しぶり！といった感じで、「お世話になりました・・・」と話さ
れる繋がり。Aさんが話したそうだったので、Bさんはそそくさと立ち去った。

Cさん

去年もこの時期にしてみましたよね。今年もたまたま図書館に来たら・・・と語るCさん。
「沖に向かって・・・」を読んで、過保護なんやね。私はつい、忘れ物はないかと点検し
てしまう。でも、失敗したときに自分で回復する力って、失敗からしか学ばませんよねと
話す。

会場にいる時間は限られているし、初対面でいきなりの会話より、ノートやアンケート
の記述の方が、来場者のいろいろな思いに触れることが出来るかもしれない。それでもこ
の場で、たまたまの遭遇は、それはそれで何かの発生である。むつは直接の被災地ではな
い。そんな場所で、毎年開催してきた漫画展。リピーターになって来場の方達には何が起
きているのだろう。

じっくり見終えて、椅子に座って熱心にアンケートを書いている方の後ろ姿を見ると、
何が届いたのだろう？といつも思う。

ここは来場した人の数だけ、個人の物語が動き始めている場なのだと言えよう。





下北・むつ市での「支援者支援セミナー」と「お父さん応援セミナー」に取り組んで

人間科学研究科教授 中村正

1. 協働した対話をとおして力をつけることーリフレクションの仕方を鍛える支援者支援セミナー

2003 年から 2004 年にかけて豪州のシドニー大学で客員研究員をしていたとき、南オーストラリア州のアデレード市にあるダルビックセンターというナラティブセラピーの拠点で開催されていたワークショップに何度か通ったことがある。ナラティブセラピーの創始者ともいえるマイケル・ホワイトが元気な頃、直接、ワークを受けたこともあり、話もできた。その後彼はアメリカのサンディエゴ市でのワークショップ中に倒れて帰らぬ人となったという。そのナラティブセラピーからは実にいろいろなことを学んだ。その一つにリフレクティングがある。ナラティブセラピーは研修についてはラジカルだった。たとえばワンウェイミラーを徹底的に批判していた。熟練のセラピストが別の部屋から若いセラピストのやり方をみる。クライアントの側からは見えないワンウェイミラーである。ナラティブセラピーのワークショップでは、ここにセラピーの権力関係を指摘し、こうしたタイプの研修の仕方ではないやり方を多用していた。クライアントや若いセラピストが立場を入れ替える。熟練セラピストのコメントにさらにコメントする。交代して熟練のセラピストの会話を若いセラピストが議論するという具合だ。クライアントも登場して自らに施されたセラピーにコメント入れるセッションを組むこともある。その様子をセラピストが聞く。これはいろんな場面に応用できるやり方である。

下北・むつプロジェクトのひとつである支援者支援セミナーは事例検討会をしている。参加者のリフレクションになるように工夫をしたいと考えているが、まだこうした到達点ではなくその前哨段階である。

2. 「インシデント・プロセス法」に学ぶ支援者支援セミナー

支援者支援セミナーは、こうしたタイプのリフレクションとまではいかななくても、地域の対人援助にかかわる多職種連携を促進することのできる事例検討会となるように工夫をしている。いつも民生委員が半数ほど参加してくださる。あとは下北半島の各市町村で福祉に関わる公務員、福祉施設の職員、看護師、保育士、警察、児童相談所の職員等の多職種の方々である。今年も盛況で総勢 90 名程の参加があった。いつも地元から家族にかかわる事例を提出してもらってみんなで検討するかたちとしている。

プライバシー保護の意味から詳細は記せないが、今年は下北のある地域に転入してきた母子所帯の、主に母親の孤立による不安と育児にかかわる事例を検討した。事例提供者は、メンタルな問題を抱え、親族の支援もうまく受けられない母親のケースが増えていることを意識していたようだ。このような問題にフォーマルな社会資源はどこまで対応できるのか。また、インフォーマルな社会資源を有効に機能させるにはどんな支援が考えられるかと問題提起された。例年だと二つの事例を出していただくのだが、今年はじっくり検討するために一つの事例とした。

事例提供者はホワイトボードにジェノグラムを書き出しながら、関連する情報を少しずつ出してもらい、参観者とともにどんな問題をもつ家族で、何をすべきなのかについての智慧をだしてもらいやり方で進めた。支援者支援セミナーは 8 人程度のグループワークとなるようにあらかじめ机が配置されていて、多職種となるようにグループ編成の準備をもらっている。

ジェノグラムワークは、課題の共有と解決の多職種が共有することを目指している。家族支援に関わる者の家族観の幅を広げていくためにもグループワークをしながら当該家族の情報を少しずつだしながら推測も交えてどんな問題のある家族なのかについて意見をだしあう。そうするとセミナーに参加している人のこれまでの家族支援や相談経験からの智慧だけではなく、自らの家族観が反映されることになる。だから公私混同ぎみに議論は弾む。そうすると自らの家族の見方のバイアスもみえてくる。なるべくなら多様な家族観ができるようにする。そうすることで問題理解の幅が広がる。こうして通例の事例提出とは異なるアプローチとしている。

どんな職域であれ定番となっている事例検討会は、相談の推移を記し、援助の経過を克明に書き、対話の筆耕をして共有しながら、先輩格の人や同僚から事細かく吟味され、アドバイスを受けるといったものだ。配布された資料は回収される。こうした伝統的な事例検討会は、本音で聞くとすこぶる評判が悪い。提供者が「不健康」になるくらいに緊張している。そんな事例検討会はなんといっても楽しくない。どんな対人援助の場面でもよく似ている。そうではなく、支援者支援セミナーは楽しくてためになる事例検討会をめざしている。

さらに地域に生きる家族である点を重視してエコマップワークを重視している。当該家

族の生きる力を尊重し、それを地域でのささえあいとつながるようにしていく可視化の作業である。さらに「問題」にばかり焦点をあてるのではなく、その家族のもつストレングスにもアプローチすることとしている。当事者たちの力と地域の力が重なるようにという意味でもある。

この支援者支援セミナーの進め方は、「インシデント・プロセス法」に学んでいる。これはマサチューセッツ工科大学のポール・ピコズ教授が考案したもので、特別支援学校や学校等で困った事例を出し合う教育臨床実践に用いられている事例検討法である。実際の教育相談活動の場において発生した問題について研修に参加している者が智恵を出し合い、解決策について共有体験を通して模索し、その後の参加者の実践的な活動に結びつけていくとするアプローチである。仕事で解決に難儀した事例を選び、その中で起こった出来事（インシデント）を中心にして苦労した諸点について情報を包括的にかつ小出しにしながら参加者みんなで智恵だしができるようにしていくという方法である。

協働するグループワークという点は共通しているが、提示されるのは「インシデント」なので、どちらかと言えば「問題行動」に焦点をあてる傾向がある。そうすると「問題にまみれたストーリー」が主流となっていく点には注意する。それがナラティブセラピーの肝心な点である。つまり、「問題」があるのは当然だが、相談につながっているのだから「問題」の指摘だけではなく、潜在化している当人の、語られていないストーリーやよくやっているストーリーにも関心を持つ。まず何よりも相談につながっていること自体が重要なポイントである。そして何よりも今現在生きていて、なんとかやりくりして生きてきたことも極めて重要なことである。この二つに着目するだけでも視野は広がる。さらに「問題にまみれたストーリー」が当事者の生き方の流儀や習慣ともなっていることも配慮する。その「問題」は当人からすれば「必要なこと」であり、その時点での当事者にとっては「合理的な軌跡」として存在しているかも知れないということになる。だからこの「問題」に対置して、外から「解決」が降りてくるのではなく、その「問題」が当人を捉えてきた歴史に内在して、少しだけ変化の隘路を協働で対話しながらさぐることになる。その協働する対話をグループワークで疑似的に体験していく際にこの「インシデント・プロセス法」は奏功する。

教育現場で多用されている本来の「インシデント・プロセス法」による事例検討はプロセス管理が徹底しているが、支援者支援セミナーのやり方はそんなに厳密ではないし、「インシデント」のとらえ方が異なることもある。しかし進め方はよく似ている。事例を提供する人が情報を細かくだして参加者がそれに推論もいれていろんなことを想起して協働していく過程となる点である。参加者は小出しにする情報をもとにしていくので、質問や推論もはさみながらみんなでその事例の洞察に関わっているという実感が得られる。何よりも協働するので複数の視線と声が反映されていく。実際に進行していく事例の流れとは別に、そうではなかった可能性も見いだされ、多様な選択肢を当人と多職種がともに構築していく過程がみえてくる。そうではなかった可能性をも含めて、「問題にまみれたストーリ

一」とは違うストーリーがありえたことやそうならならずに「問題」の方へと押しやられていく過程にこそ当人の「脆弱性」があることがみえてくる。主流となっているストーリーではなく、そうではない別のストーリーへと展開していく可能性を探ること対人支援のダイナミズムが浮かびあがる。

グループディスカッションをとおして当事者と支援者がかかわる当面の課題が明確になる。その家族の様子を単に受動的に聞いているのではなく、本来の筋や流れとは異なっても良いので自由に話をしていく。自らのバイアスも感じ、他者の想像力に関心を示し、時には異なる意見もだし、相互に尊重しあいながらまとめていく。課題を整理し解決法を見出すことにもなる。地域で活躍する支援者の広がりがわかるようなセミナーとなってきた。

3. ケースセオリー構築の一環としての支援者支援セミナー

もちろんこの「インシデント・プロセス法」はグループワークの進め方なので、ケースセオリーに基礎を置いて進めていく必要がある。たんなるグループワークのやり方というだけではない。ケースセオリーとは、事例とは何かという意味である。事例は人の人生そのものに関係することになるが、「問題」をとおしてであるので、何らかの権力性・事件性を帯び、臨床的であるので「介入」となる。専門的な資格、実践の倫理、法的根拠、制度的な枠が背景になって出会うことになる。

もちろんそこには自然な日常性の中を生きている人たちなので多様な地域の人々が登場する。その接点に民生委員等の専門職ではない地域の人々が存在している。支援者支援セミナーの意図するところをまとめると次の四点になるだろう。①実践知を尊重する。②多職種連携は協働的対話を意味し、多声性の表現となる点を理解する。③ストレングスやGoodも含めたその人の合理性を理解する当事者理解を大切にする。④共同した意思の形成と決定を中心とした人権の視点も不可欠である。





4. お父さん応援セミナー-30人の父親たちが夜に来てくれた

昨年は私自身が参加できずにお父さん応援セミナーは開催しなかった。少しばかりイメージチェンジしたチラシを作成してもらった。夜のセミナーらしい印象になっている。今年はいつもと違い初めての参加者ばかりだった。ただ一人、毎回参加している常連さんがいるので彼を除いてだ。例年だとリピーターが3分の1程度はいるのだが。このチラシに反応して下さった方もいた。リード文にあるが「妻にも言えないこと」を話し合うという点に関心をもたれたようだ。最後にみんなで感想を述べ合う時にそのような期待をもってきたと語っていた方がいたからだ。もちろん二人一組で、四人一組で初めての男性同士にしてはたくさんの私的なことを話す時間をたっぷりと確保したつもりである。

参加の動機はいろいろである。動員されてきたという方々も毎年のことだが一定数いる。もちろん自発的に来てくれた方が多い。男性たちのプライベートな事項について話をする姿勢は熱いものがある。内容はコミュニケーショントレーニングである。今回は、わたしメッセージで話す、ラポートトークとレポートトークの区別、ありがとうと他者に言うことの大切さ、問題解決型の思考で家族をみていないだろうか等のコミュニケーションワークをおこなった。

家族に対して最近どんな場面でありがとうと言いましたかという問いかけに照れくさそ

うに話をしていた姿が印象的だった。その反応で、妻と自分とではありがたいの意味の勘所が違うという話がでていた。妻が感謝して欲しいポイントがわからないというか、微妙にずれることがあるらしい。聞いてみるとその男性は「ありがとう」を頻発すると感謝の気持ちが薄れるのであまりいわずにここぞとばかりのところで気持ちを伝えるのだそうだ。でも妻はもっと日常的な、何気ないことにこそ「ありがとう」をいって欲しいと思っていることが最近わかったというのだ。よい気づきだなと思った。

そして最後に男たちに聞いた。「花を買ったことありますか？」と。もちろん多くの男性たちは「ある！」と答えた。「ではそれは誰のためですか？」と聞くと、ほとんどは妻のため、母のためだと答えた。そこで最後にこんな提案をしてみた。「次は是非、自分のために花を買ってみてください」と。これはアメリカで男性問題を調査しているとき、脱暴力のグループワークをしている事務所に大きく掲げられていたことだ。男たちは照れくさそうに躊躇していた。いままでのやり方を変える、そんなに難しいことではないと思うのだが、やはり男らしさの縛りは相当にきついものがあるようだ。

また来年も会いましょうということで今年のセミナーを終えた。



「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」に参加して

臨床心理学領域 M1 鈴木ひかり

私はこれまで、むつはおろか東北にも足を運んだことがなかった。京都からおよそ 8 時間、1200 キロにも及ぶ旅路の末、本州最北端の地へとたどり着いた。ひんやりとした空気や独特のなまりのある言葉が、遠い北の地に來たことを教えてくれた。

プロジェクトに参加するにあたって、むつや青森県に関してさまざまなことを調べていた。調べていくにつれ、原発関連施設や在日米軍基地、自衛隊施設など青森県がもつ特有の現状を知ることになった。恥ずかしい話であるが、このように事前調査をするまでこう

いった現状に意識を向けることがなかった。日本国民全体に関わる問題であるのに、そのことに関して自分が今までいかに無関心であったかを痛感するものであった。下北に立ち並ぶたくさんの風力発電の風車を眺めながら、そのことをまた実感した。

むつは受け入れ機関の連携や支援者同士のつながりが強い。そのことは先輩方から引き継がれてきたことの中で、私が最も印象に残っているものであった。このプロジェクトに参加することで、そのことを実感を伴って理解することができた。むつの職員さんは、普段の仕事をこなしながらこのプロジェクトを念入りに準備してくださっていた。児童相談所や子育て支援課、図書館や公民館に PTA、さまざまな機関の多くの人々の協力のもとこのプロジェクトは成り立っていた。支援者支援セミナーでは児童相談所・保健所・警察・保育園・民生委員などさまざまな場所で働いている方が一堂に会し、事例検討を行いながら活発な意見交換が行われた。トラブルを抱える家族を地域がどのように支えることができるのか。事例検討の意見交換の中で、他職種の方の意見を聞き、納得するような感心するような場面が何度か見られ、参加者の方々の中に異なる視点に気づくような場面が多々あったように見受けられた。そこに連携の重要な意味が具現化されているような気がした。それぞれが異なる立場や経験、視点を持ちつつも、この家族はどんな家族だろう、どう支えることができるだろうと同じ意識を持つことが、連携の本質なのかもしれないと思った。

印象に残っていることがある。団先生の漫画トーク展後、スタッフとして参加していらっしやった職員さんが昨年は一市民として漫画パネルを見たと話してくれた。その時見た感想ノートに「どうしてむつで？」と書かれていたことを覚えていると。私たちの事前調査ではむつと震災の関連はあまり見つけることができなかった。その職員さんは「むつでは震災による被害はあまり大きくなかった。しかし自分たちでは大したことないと思っていたところにも目を向けてくれる人の存在があるということが支えになるのかもしれない」と語ってくれた。この話を聞いたとき団先生が漫画展で話された「理解が届けるものがある」という言葉が脳裏によぎった。理解しようと向けるまなざしが、いつか誰かの支えになるのかもしれない。

このプロジェクトを通して、たくさんの学びと出会いがあった。実際にむつを訪れることで、むつの支援者同士の連携やつながりの強さを実感することができた。支援者の方の「この家族を支えたい」という想いを感じることができた。多くの支援者やむつの方と出会うことができた。私たちをあたたかく迎えてくださるむつの方々のやさしさに触れることができた。それらはこれからの私の糧となるだろうと確信している。私にはこれから何ができるだろうか。その答えはまだ出ない。まずは理解しようと努めることだ。むつにまなざしを向け、むつを訪れたものとして語ることが私にできることではないだろうか。そして、10年継続するこのプロジェクトの8年目を担う者として、受け継がれてきたバトンを9年目にしっかりと引き継いでいけたらと思う。

むつは遠い。しかし、むつを訪れその空気や街並みを感じ、そこでたくさんの人に出会

ったことで、わたしにとってむつは以前よりずっと近い場所になった。

このプロジェクトに携わり、私たちを温かく迎え入れてくださったたくさんの方々の支えによって、多くの学びと出会いを得ることができました。本当にありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in むつ」に参加して

人間科学研究科対人援助学領域 M1 河村浩世

私が、むつ市に行こうと思ったきっかけは震災のプロジェクトでなぜ青森県なんだろうと単純に疑問が沸いた。私自身、2011 年テレビで見た東日本大震災でのショッキングな映像は今も思い出すと鳥肌が立つ。私は丁度外に出ており、母の誕生日ということもあっていつもより浮かれた気分でケーキを買って家に帰りテレビをつけたその瞬間に津波の映像を見て絶句してしまった。ここは同じ日本なのか…あの日から、人々はみな暗い気持ちで過ごしていたと思う。

その二週間後私は友達の留学先のオーストラリアに行った。自分自身被災していないのに、見知らぬ外国人の方から声を掛けられた。「あなたの家族は大丈夫？」と。

私はあの時に毎日東北の人々のことを思い祈ることしかできなかった。あの時の無力感と悔しさと悲しさは忘れない。私が東北の宮城、福島、岩手を訪ねたのは震災から 3 年後である。私は何もできなかった自分自身にいつも東北に対して罪悪感のようなものを抱いていたが、このプロジェクトを知った時に即刻行こうと決めた。

むつ市を訪ねるにあたって事前学習の課題が出され、私達はむつ市のことを調べる必要があった。むつ市は 3.11 での被害は、ほかの東北地方と比べるとやや低いものの他の都道府県にはない特別な地であることを知った。まさかりのような形をしている下北半島は美しい海と山を擁する半島である。そこには原子力関連施設、自衛隊関連施設、日米軍基地などが近接している。下北半島に住んでいる人々の思いを馳せると、行く前にはあまりイメージが沸かなかったが、それらの施設は日本に全体の利益を生み出し、都会の人々に豊かな生活を送るエネルギーを供給している場所を担っている下北の土地、そこに住む人々。そこは広大な自然があり故郷という情景がぴったりの美しい土地である。むつ市がそのような土地であるということも知らず、関心さえ持たなかった自分を省みる機会となった。

行ってみると、まず、その遠さを肌で感じてほしいとの村本先生の言葉を十分に感じた。始発から東京駅に行き、そこからまた、はやぶさに乗って八戸に着いた瞬間肌寒い。真っ直ぐ続く二両列車の線路は緑だけに囲まれ、ノスタルジックと言ったらいいのか緑以外何もないのである。レンタカーを走らせると人は少なく、子どもを見ない。私達はレンタカーで六ヶ所村 PR センターを目指す。山の中の道路を走り抜けると、巨大な真っ白の風車があちこちで立っている。近代的な建物が大きく見え、周囲は芝生で整備されており公園

で遊べるようになっている。私のほかは誰もいない。事前学習で私たちになりてに学習し、個人的な見解を深めていたが実際に足を運んで感じるものは全く違うことを私は肌で感じた。

やっとの思いでむつのホテルに着くと、懇親会と立派な会場に案内され、平日の夕方にも関わらずたくさんの関係機関の方が来られた。むつの独特な温かい方言とみなさんの笑顔で歓迎され、明日からのセミナーの期待はますます膨らんだ。セミナーの参加者は地元の地域福祉関係者の方が 100 名を越えるというのですが、私達の発表にも不安が残り、最後までみなで話し合い模索することになった。

翌日のセミナーは続々と人が集まり、初めて参加するという方から 5 回目という方も私のグループにはおられた。共通して言えることは一人ひとりの方がとても熱心に、自分たちの地域とそこに住んでいる人々の生活を更に良いものにしたい、このセミナーへの期待が大きいということである。児童相談所から寄せられた事例発表は、各グループで活発に議論が盛り上がり、様々なバックグラウンドをお持ちのスクールソーシャルワーカー、障がい者施設の支援員、地域の民生委員、子育てをされている立場等から様々な意見が出て、多く学び合う機会となった。大間から来てくださった高齢の女性がおり、私は何か意見を出してもらいたいと思ってその人に意見を求めるも、微笑むだけで話を伺うことはできなかったが、一人ひとりの参加者の話を誰よりも熱心にノートに記録されている真剣な眼差しには、対人援助職としての大切な支援者の姿勢を教わったと思う。

翌日の団先生の漫画トーク展では続々と人が集まり、みなそれぞれの人が誰かの顔を思い浮かべ、自分と重ねたりしながら物語の中に入っておられる。「家族みんなで楽しみにしてきました」と言われる女性の笑顔。静かで美しいむつ市の図書館では、その会場だけ来られた方の優しい空気に包まれており、私達もその場において携わり共有できただけにただ、感動した。このプロジェクトは、まさに人と人が関わることで生み出され、積み上げてきたものだと、参加して感じた。たくさんの人が歓迎して下さり、こんなに温かく素直に意見が出るむつ市のみなさんに心から感謝したい。自分は今後出会う人、社会にどのような形で得たものを還元できるのか、帰ってからの私はむつ市を訪れる前とは違う特別な思いを東北に対して感じている。

この 3 日間自身が得た経験は貴重で、本当に大きい。私はまた再び何度もむつ市を訪れ、しっかり日本の社会で今何が起きているのか、遠く離れていても考えていきたい。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2018」に参加して

人間科学研究科対人援助学領域 M1 関 浩子

あっという間の充実した 3 日間だった。初日は始発の急行に乗って、延々と電車に乗り、自動車で長距離を走り、やっとうつにたどり着くことができた。最初は不安に感じていた

が、懇親会でのあたたかい雰囲気によって、初めて行ったところとは思えないような親しみ深さを感じた。驚いたのは、児童相談所次長も PTA 会長も挨拶の中で、初めての参加だと言われ、大学院生も全員初めてであることも話され、それにもかかわらず、初めてでも全く大丈夫のように、代々受け継がれた安定した取組であり、むつの方々が楽しみにされているプロジェクトであることがすぐに伝わってきた。

支援者支援セミナー

下北地方の支援者が集まって家族の力を引き出す支援のコツを学ぶという内容で、対象は、むつ市をはじめ、大間町、東通村、八戸、佐井村、弘前、風間浦村などの支援者である。民生児童委員、教育（学校）福祉関係・要保護児童対策地域協議会関係機関、子育て支援を行う機関、福祉事務所、保育園、障がい者就業・生活支援センター、療育園、警察生活安全課の方々などが学びを得ようと集まって来られた。今回はこれまでで一番多くの参加者があったとのことで、100 名近くの方々の熱気が感じられた。セミナーでは、事例を考えるにあたり、ジェノグラムを使って情報を整理しながらグループで考えていくワークショップを行った。大学院生は各グループに入り、ファシリテーターの役割をしながら、それぞれの地域や立場からの発言を聞かせていただくという経験をすることができた。家族の持つ力について考えたときは、事例の当事者に対して、気持ちを大切にしながら、その力を認め、さまざまな機関が連携しながら支えていくという方向性が出てきた。また、グループの方が青森について親切に教えてくださったことも印象に残っている。

村本先生からは、東日本・家族応援プロジェクトは、大学の社会貢献として、外から来て何かするというより、その土地の人が力をつけていくことを支援するという取組であり、イベントではなく、細く長く 10 年やると決めて取り組んできていること、支援者支援者支援セミナーでは、大学で積み上げてきたことを地域の課題と一緒に考えていくことに生かし、年々広まっていくことを楽しみにされていることを話された。ワークショップのまとめでは、クライアントの家族の持つ強みを生かしながら、いろんな人が関心を持って子育てに関わることの大切さについて聞かせていただいた。

むつ市図書館での漫画トーク

「～本州のてっぺん下北半島から家族の笑顔を～」をスローガンにしたこのプロジェクトで、団先生の「木陰の物語」の物語が始まった。団先生は、8 年目になったプロジェクトについて、大きく変えたりせずに繰り返していることの意味、同じ事をずっと繰り返していくことは家族の営みに近いこと、良いと思うことは続けていると安定感があり、変化が起こることなどを話された。今年のテーマは「管理職」であった。ワークショップの時間になり、隣の人と会話することになった。その方は開口一番に「ちょうど、私が今思っていることで・・・」と語られた。最近むつに戻ってこれ、管理職となられたとのことで、スタッフの人数が多い職場であるため、「マニュアル、マニュアルばかりで・・・」と嘆い

ておられた。ご自分は援助職として、一人ひとりに合った支援をしたいのだが、一律に決められたとおりにやらなければならないことに対して葛藤をされていたようで、タイムリーに団先生のお話を聞いて深く考えておられる様子だった。団先生は最後に、偶然のつながりについてもお話しされ、物語の管理職の方が、むつの公民館でこの秋に講演をされるとのことで、長く続けることでこのようなつながりが生まれることがあるとお聞きした。

最終日には反省会があり、むつ市役所から初めてプロジェクトに参加された方は、「自分たちのような震災の被害がないと思っている地域にも目を向けてもらうだけでも違うだろう」という事を話された。院生からは第二の故郷のように感じたことや、むつの方々にあたたかく迎えていただいたこと、ここまで続けてこられたプロジェクトに立ち会えて嬉しかったことなどが述べられた。最後に実行委員会の眞手さんから「あつという間の3日間であり、これまでの8年間はただ続いただけでなく、みんなの熱気で一つのことを考えながら意味のあることをやってきた。また来年も！」という力強い言葉を聞かせていただいた。

何よりもむつのスタッフの方々の熱意が素晴らしかった。テキパキとマネジメントされていた杉浦さんを始め、汗をいっぱいかきながら実際面での動きをされていた眞手さん、兎相の方々、市役所、図書館の方々の取組には頭が下がる思いである。

私たち院生も、むつを訪れることによって、東日本・家族応援プロジェクトの意義・意味を知ることができた。遠く離れた所から年に一度というプロジェクトを細く長く続けるからこそ、むつの地域の力がわき上がり、育っていくという支援ができること、大学院生にとっても、毎年入れ替わるが故に、このプロジェクトの継承をするための力が育ち、主体的に取り組むという姿勢が自分たちの学びにもつながり、むつに行ってこれらのことを実感したからこそ、むつの事を伝え、見守りたいと思うこと、すなわち証人となることができるということではないかと思った。むつで目にした色鮮やかな花々、どこまでも澄んだ宇曽利山湖の風景、ヒバの香りとともに、むつで出会った方々との交流のことを大切に果たためていきたい。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2018」に参加して

立命館大学人間科学研究科臨床心理学領域 M1 佐藤友紀

プロジェクトに参加する前に取られた事前アンケートにおいて、このプロジェクトに参加する動機に関して、私は「震災について体感的に学ぶことが目的である」と答えていた。過去の事後レポートにも書かれているが、むつは震災による被害が比較的に少なく、被災地としてメディアから取りあげられることは少ない。報道されていないだけで、現地に行かなければ分からないこともあるのではないかと考え、むつのプロジェクトへの参加を決めた。

しかし、震災による被害については、現地でもあまり感じなかった。むつに行く前に、震災について調べたり、原発関連施設に関する DVD をいくつか観ていたため、むつに関して被災のイメージを強く結びつけてしまっていたことに気づいた。先述したように、プロジェクトへの参加の動機は、震災について体感的に学ぶことであつたが、体感したのは震災についてというよりも、10 年間プロジェクトを続ける意義についてであつた。プロジェクト初日の歓迎会では、いくつかのグループに分かれて食事をした。職員の方との会話で印象的であつたのは、職員の方が「むつ市は新しい取り組みに閉鎖的で、外から来た人に懐疑的であり、反対に関西はパワフルなイメージがある」と仰っていたことである。その言葉は、私がむつの方々に抱いた印象には全く当てはまらなかった。確かに、プロジェクト初期の頃の事後レポートでは、「外から来る者」だと認識されている感があったという報告もされていた。私がそのように感じずに、むしろ温かく歓迎してくださっていると感じたのは、私たちが「外から来る者」でなくなったからなのかもしれない。私は 8 年目にプロジェクトに参加したため、職員の方が仰った地域の差は体感することができなかった。しかし、地域性が異なるものが集まることによって新しい空気感を作り出すことができるという点において、遠く離れた地でプロジェクトを継続することの意義を新たに見出すことができた。

支援者支援セミナーにおいて、むつの支援者の方々のつながりの強さについて学ぶことができた。ある地域では、小さな町であるからこそ、問題があつた際には直接関連機関と連携しやすいため、スクールソーシャルワーカーが必ずしも必要でないという。私は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーがいない地域について、制度が整っていないからではないかと勘違いしていたが、必要でないくらいに、地域の連携がとれているからであることを知り、地域によって支援の方法や必要な制度が異なるということを改めて感じた。

むつの方々の連携の強さや、温かみのある空気感を体感し、むつは私が支援者として動く際の理想像となった。このプロジェクトで学んだことは、今後私なりの形で社会へと還元させていきたい。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2018」に参加して

立命館大学 人間科学研究科 臨床心理学領域 M1 坂口龍也

今回私が「東日本・家族応援プロジェクト」に参加を決めた理由として、大きく 2 つの理由がある。

1 つ目は、学問的な関心によるものであつた。私自身、被災地支援に関心があり、教科書などだけではなく、実際に現地で自分の身体を通して支援について学びたいと考えていた。

2 つ目は、むつ市だけではなく、青森県を初めとした東北地方に足を踏み入れたことのない私にとって、この機会がなければ一生行くことがないだろうから行ってみようと考えたというのが私のプロジェクトの参加理由であった。

むつに向けて出発する前に事前学習として、むつや青森県に関する発表資料の作成を行い、チームでまとめた。いざ調べ始めてみると、同じ日本なのに知らないことが多すぎて、今までの自分の視野の狭さを痛感した。一方で、青森県と本州最北端に位置するむつ市についての理解が深まりつつあるように感じるようになっており、「もっと知りたい」と知的好奇心がくすぐられるような感覚であった。

データ上ではむつ市の震災についての直接的な被害は見えなかった。しかし、それ以外の原子力発電所、米軍基地、自衛隊施設などの、他の都道府県にはあまり見られない環境を青森県が抱えていることがとても印象的であった。日本を支える施設があり、遠く離れた土地に住んでいる自分もその恩恵を少なからず受けているはずなのに事前学習を行うまでは、全く知らなかったし、意識をしなかったように思える。事前学習からはじまり、むつ市で過ごした4日間で、むつ市に対し大きな魅力を感じるようになっていた。

プロジェクト中は各種セミナーに参加し、むつ市やその周辺の地域でお仕事をされている方々と交流した。支援者支援セミナーでは、むつ市で起こっている実際のケースをもとに、グループワークを行った。私が参加したグループでは、議論や意見交換がとても活発に行われており、半数の方々が「時間が足りない」と仰っていた。私が抱いていた東北地方のイメージと正反対であり、このような活発な議論の経験があまりなかった私にとって、非常に貴重な経験をすることができたように思える。

お父さん支援セミナーでは、リピーターとして何年にも渡って参加されている方がいらっしゃった一方で、初めて参加する方々が多かった。女人禁制ということで、心なしか伸び伸びとされていた印象を受けた。中村正先生がファシリテーターとなり様々なワークを行っていく中で、有意義な交流を行うことが出来たと感じている。最後には皆さんが、セミナーが始まる前と比べてとても良い笑顔になっていた光景が広がっていた。

むつ市図書館で行われていた団先生の漫画展を見学に行った時、感想ノートを少し読まして頂いた。そこには、「心残りだったことに対し、団先生の漫画を読むことで認知が再構成され、心が軽くなった」というようなことや、「こんな素敵な時間を過ごせてよかった」、「背中をそっと押された感じがした」という旨の感想が書かれていた。また、「来年も楽しみにしています」という感想が多々書かれており、団先生の漫画展を、非常に楽しみにされている方々がむつ市にはたくさんいらっしゃるということを感じた。私自身、感想ノートに書かれていた1人1人の言葉を読んで、とても温かい気持ちになり、自然と笑顔になっていたことに気が付いた。語弊があるかも知れないが、このプロジェクト中で最も心に

響いた瞬間であったと私は思う。

今年で「東日本・家族応援プロジェクト」は8年目になる。プロジェクトを重ねるごとに、これまで参加した人達の意味や経験が受け継がれていくことを身をもって感じる事が出来た。私はプロジェクトを通して、むつと「出会う」ことができた。単純にその地を訪れた際の感覚ではなく、ある種の another sky のような温かい感覚が芽生えているように思える。単発的な支援ではなく、継続的な支援により、蓄積されてきたつながりが太く、強靱なものへと発展する。それを可能にしてくれるこのプロジェクトに参加することができ、とても嬉しく思う。

今後自分が臨床心理士・公認心理師として臨床実践に携わっていく上で、現場ではどのような活動がなされているのかについて、このプロジェクトを通して学び、これからの自分自身の実践していく際の姿勢を学ぶことができた。今回のむつでの学び、そして経験を今後のプロジェクトに引き継いでいきたいと考える。

今回、このプロジェクトを準備し、私たちを笑顔で迎えてくれたむつ市の関係者の皆様、村本先生、中村先生、団先生、そして共にプロジェクトに参加した6人のメンバーに心から感謝致します。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2018」に参加して

人間科学研究科 臨床心理学領域 M1 秋葉宏美

中学3年生の時、東日本大震災によって私は被災者となった。とは言っても、当時の私は宮城県仙台市に住んでいたため、地震によってライフラインが断絶されたことはあっても、津波による被害はほとんどなかった。少なくとも私は、2、3ヶ月後には、震災前とほとんど変わらない生活をしていたこともあり、あまり被災者という実感がなく、震災によって心の傷を負ったという自覚もなかった。しかし、最近になって、大学の先生に当時のことを聞かれ、改めて説明しようとする、声を詰まらせて何も言えなくなるという経験をした。そこで初めて、自分がこれまで被災者という自分と向き合ったことがないと気づいた。今一度、自らの被災経験と向き合いながら、被災者と支援者双方の立場から、対人援助とは何かについて考えたいと考えたことからこのプロジェクトへの参加を決めた。

支援者支援セミナー終了後、中村先生に「どうだった？」と尋ねられ、「(ケースが) 難しかったです、どうしたらいいんだろうと思いました」と答えると、「どうにかするんだよ、生きていればどうにかなる」と言われた。その後、夕食のレストランでは団先生と同じテーブルになった。ひょんなことから団先生のお子様の話になった。団先生によると、あれをしてはいけない、これをしてはいけないといったような子どもを縛り付けるようなルールは団家には一切ないらしい。危険な状況になった際の自分自身を守る術を教えた上で「死

なければ何してもいい、生きてさえいればいい」という唯一のルールを設けているそうだ。

全く異なる場の異なるタイミングでお二方に言われた言葉ではあったが、中村先生の援助論と団先生の育児論には通じるものがあるように感じた。対人援助は決して専門職の特権ではなく、もっと日常にありふれているはずである。専門職だからといって必ず困っている人を助けられる訳でもない。日常生活の中では専門的な知識を持たない人々の方が支援を必要とする方に寄り添う機会が多く、それらのネットワークの方が力強く作用する場合もあるだろう。そのフィールドの限られた資源を最大限に活かすことで、生き抜く術を身につける。お二人の先生のお話を聞いて、セミナーの中で何度も言及されていた「当事者の力を引き出す」とはこのことなのではないかと自分の中で腑に落ちた。

また、団先生の漫画トーク終了後の反省会で、むつ市役所の職員である菊池さんがこのような旨のコメントを述べた。「震災当時、むつは他の地域と比べて被害が少なかったため、世間からあまり目を向けられなかった。そんなむつで8年もプロジェクトを継続し、関心を持ち続けてくれるのは非常にありがたいこと」。

実を言うと、私はこのプロジェクトが始まる前から「なぜむつなのだろう」と疑問に感じていた。研究会での事前調査報告で、私は青森県全体における被災状況について担当したが、確かに青森県もむつ市も他の被災地域と比較すると被害が少ないように感じた。そのため、東日本大震災をきっかけに立ち上げられたこのプロジェクトに、なぜむつが組み込まれているのか分からなかった。

しかし、菊池さんのコメントを聞いて非常に納得した。震災のような大きな出来事でなくとも、私たちの日常の中には確かな痛みや生きづらさを抱えながらも誰にも気づいてもらえない人々は存在する。そこに目を向け、そっと寄り添う。簡単なようで実に難儀なことである。また、同時に、それは対人援助職にとって必要不可欠な姿勢ではないかと気づかされた。実のところ、私は自分の被災経験から、最初は震災時に直接的な被害が多かった他の地域で行われるプロジェクトに参加したいと考えていた。ところが、様々な都合の関係で、失礼ではあるが「むつでもいいか」と妥協して参加を決めた節があった。しかし、この時の反省会をきっかけに「むつに行ってよかった」と心の底から思えるようになった。

むつでのプロジェクトにおける「支援する―支援される」という二元論的視点を超越した関係を通して、対人援助の在り方について大いなる学びを得られた。現地でのあらゆる出会いに感謝の念を禁じえない。これまでむつに関与してきた方々の思いを継承し、後輩たちに引き継ぐことで、年々厚みを増していくこのプロジェクトが無事に10年という節目を迎えられることを心より願っている。

「東日本家族応援プロジェクト in むつ」に参加して

立命館大学人間科学研究科臨床心理学領域 M1 藤田佳恵

私が東北の地を訪れたのは、今回が初めてだった。もちろん、むつを訪れたこともこれまでになかった。むつとは、青森とはどのような場所なのだろう。まずは、むつや青森について知ることから始まった。

大学での事前報告、レポートなどを通して、むつや青森についての情報を集め、共有した。これまで知らなかった、青森独自の事情が見えてきた。原子力関連施設や自衛隊、米軍基地などについて、これまで何も知らなかった自分を恥じた。それと同時に、「知る」ことが出来たのだから、これからはその事実を、心にとどめ続けていこうと感じた。また、むつは、どこか自分が生まれ育った土地に似ている部分があるのではないかと感じるようにもなった。半分、勘のようなものではあったが、それもあって、直接むつを感じてみたい、という気持ちが強くなった。

4 日間、むつの地で過ごすこととなったが、電車や車の外に流れる景色には懐かしさと新鮮さが混在し、不思議な魅力を感じた。現地の方々がうれしそうにむつについて語ってくださるのも助け、むつは、大好きな土地になった。

プロジェクトでは、支援者支援セミナーや団先生の漫画展に、スタッフ兼参加者として携わらせていただいた。

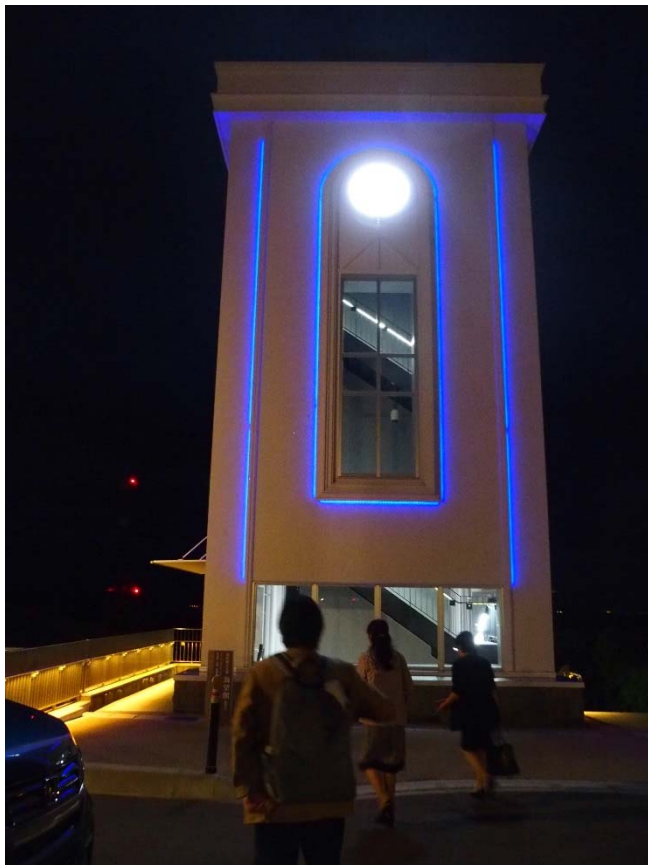
支援者支援セミナーは、さまざまな職種の支援者の方々が、1 つの事例について活発に議論される様子を、間近で拝見させていただく貴重な機会となった。グループ内でもさまざまな意見が出ていたが、他のグループではまた違った角度からの意見も上がっていた。多職種による意見交換によって、これほどまでに 1 つの事例が膨らんでいくのかと、驚きと感動が湧き上がった。

団先生の漫画展では、感想ノートに書かれた「また来年も来たいです」というような一文が、とても印象に残った。次があることそれ自体が、誰かの心に何かを残すのだということ、実感したように感じる。

私は、8 年続くこのプロジェクトの、ほんの一部を垣間見たに過ぎない。さらに、実際に現地で携わらせていただいたのはそのうちの 4 日間だけである。しかしそれでも、8 年続いた理由、8 年続けたことの意味、次があるということの意味が、現地に行くことによって発見できた部分は大きい。それは、現地のスタッフの方々の連携の強さ、支援者支援セミナーでのリピーターの方の存在、漫画展に来られた方の「また来年」の一文などを、実際に見ることができたからではないかと感じている。

このプロジェクトを通して関わってくださったすべての方々に、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

●夜のフィールドワーク





●交流会





● スタッフ集合写真

